

延宝5年10月9日(1677年11月4日)房総沖地震津波の浸水標高について Heights of the tsunami of the Empo Boso-Oki earthquake of November 4th, 1677

都司 嘉宣^{1*}, 今井健太郎², 矢沼 隆³, 馬淵幸雄³, 大家隆行⁴, 岡田清宏⁴, 岩淵洋子⁵, 今村文彦²

TSUJI, Yoshinobu^{1*}, KENTARO, Imai², YANUMA, Takashi³, MABUCHI, Yukio³, OOIE, Takayuki⁴, OKADA, Kiyohiro⁴, IWABUCHI, Yoko⁵, IMAMURA, Fumihiko²

¹ なし, ² 東北大, ³ パスコ, ⁴ パシフィック・コンサルタンツ, ⁵ 原子力安全基盤機構

¹ none, ² Tohoku U., ³ Pasco, ⁴ Pacific Consultants, ⁵ JNES

延宝5年10月9日(1677年11月14日)の房総沖地震津波については、羽鳥(1975、1979、2003)、都司(1994)、および、竹内ら(2007)がある。本研究では、房総半島、および福島県のいわき市、および宮城県岩沼市において新たな津波浸水点を加えることができた。津波浸水標高の測定に当たっては、江戸時代の村の被害数記載に対してはできるだけ平凡社『日本歴史地名大系』によって総戸数とその村の被災当時の支配関係を確認すること。江戸期の集落の様子を推定しうる明治期の5万分の一地図上に中心集落を確認すること。必ず古文書の記載点の現地を訪問し、測量器械で測量した数値を基礎とすること、以上3点の手順により決定した。そのさい、30%以下の家屋の流失があったときには敷地上2mの冠水があった、半数近い家屋の流失した村は敷地上2.5mの冠水があった、大部分の家が流失した場所は敷地上3mの冠水があったと推定した。

このうち宮城県岩沼市については、『萬天日録』(武者,1946,第1巻 p881)に「奥州岩沼領被害民屋四百九十軒余流、男女百二十三人、馬二十七匹溺死」とあったが、房総沖の震源から遠すぎることから、「岩沼」は「岩城(福島県いわき市)」の誤ではないかと判定されたせいか、これまで宮城県岩沼市の現地で測定されたことがなかった。しかし、『巖有院実記』に記された「陸奥の田村右京亮建顕も此の害にかかり」の田村右京が岩沼藩の領主であることが判明し、宮城県岩沼にも被害があったことが確認された。

千葉県大原町矢指戸で12.8m、外洋から銚子市高神の小畑池に至る鞍部で13.5m、いわき市薄磯で6.0m、宮城県岩沼宿で6.4m、旧早股村熊野神社で5.7mの浸水高さがあったと推定される。

キーワード: 歴史地震, 歴史津波, 房総沖地震, 津波地震

Keywords: historical earthquake, historical tsunami, Boso-oki earthquake, tsunami earthquake

